



Data 2023-23

監督・脚本：フランソワ・オゾン
 原作：エマニュエル・ベルンエイム
 『Tout s'est bien passé』
 出演：ソフィー・マルソー/アンド
 レ・デュソリエ/ジェラルデ
 イヌ・ペラス/シャーロット・ランプリング/エリック・カラヴァカ/ハンナ・シグラ/グレゴリー・ガドゥボア

👁️👁️ みどころ

『海を飛ぶ夢』（04年）をはじめ、“尊厳死”をテーマにした名作は多い。洋の内外を問わず、それを望む人は多いが、“安楽死”との異同を含め、各国の法的対応は？下手をすれば、手を貸した医師等は殺人幫助罪になってしまうから、本人も支援者もしっかりお勉強を！

『ファーザー』（20年）を観れば、認知症の父親を世話する娘も大変だが、いきなり「終わらせて欲しい」と言われた娘も大変。13歳の時に『ラ・ブーム』（80年）でスーパーアイドルになった女優ソフィー・マルソーが、本作ではフランソワ・オゾン監督とはじめてタッグを組んで大奮闘！

わがまま親父と、妻やかつての恋人(?)との距離感や人間関係はいかにもフランス的だが、本作はすべてエマニュエル・ベルンエイムの自叙伝的な原作に基づくもの。ジャン＝リュック・ゴダール監督や保守思想家の西部邁先生のケースとも対比しつつ、前向きに尊厳死のあり方を考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ オゾン監督×原作者×女優ソフィー・マルソーが実現！ ■□■

フランスのフランソワ・オゾン監督は、『婚約者の友人』（16年）（『シネマ41』289頁）、『しあわせの雨傘』（10年）（『シネマ26』166頁）、『危険なプロット』（12年）（『シネマ32』180頁）、『グレース・オブ・ゴッド 告発の時』（18年）（『シネマ47』142頁）等で超有名。それに対して、オゾン監督が当時のエージェントを通じて、2000年に出会ったという、フランス人作家、エッセイスト、脚本家であるエマニュエル・ベルンエイムを私は全く知らないし、その自伝的小説である『Tout s'est bien passé』も全く知らないもの。他方、13歳の時にオーディションで700人の中から選ばれて主演を務めた映画デビュー作『ラ・ブーム』（80年）の世界的大ヒットでスーパーアイドル

となり、続編『ラ・ブーム2』（82年）でセザール賞有望若手女優賞を受賞したフランス人女優ソフィー・マルソーは超有名。彼女は、その後、『007/ワールド・イズ・ノット・イナフ』（99年）等のハリウッド超大作にも出演し、今ではフランスの国民的俳優として敬愛されている。さらに監督業にも進出した彼女は5作を監督している有名な才女だ。

ところが、そんなオゾン監督と女優ソフィー・マルソーは、「一緒に仕事をしたい」という希望はどちらも持っていたにもかかわらず、タイミングが合わない、役柄が合わない等の理由でこれまで実現しなかったらしい。しかし、女流作家エマニュエル・ベルンエイムの原作の映画化を決めたオゾン監督が、直感的に「これが最後のふさわしい企画だ」と感じて、ソフィー・マルソーにエマニュエルの本を送ったところ、彼女の出演が決まったそう。そんな企画が進行している過程の2017年にエマニュエル・ベルンエイムはがんのため死去してしまったが、そんなこんな経過によって、オゾン監督×原作者エマニュエル×女優ソフィー・マルソーの本作が実現！しかして、『すべてうまくいきますように』と題された本作の内容は？

■□■テーマは尊厳死！“あの名作”との対比も一興！■□■

本作のテーマは尊厳死。それを描く視点は、尊厳死を願う父親アンドレ（アンドレ・デュソリエ）の世話をする長女エマニュエル（ソフィー・マルソー）のものだ。もちろん、このエマニュエルの視点は、原作者エマニュエル・ベルンエイムの視点と重なるもの。なぜなら、美術コレクターのアンドレ・ベルンエイムと彫刻家のクロード・ド・ソリアの娘として生まれたエマニュエル・ベルンエイムの原作『Tout s'est bien passé』は、エマニュエル・ベルンエイムの自叙伝的小説だからだ。

尊厳死をテーマにした映画は多いが、その（古典的？）名作は、アレハンドロ・アメナーバル監督の『海を飛ぶ夢』（04年）（『シネマ7』197頁）。同作の主人公ラモンは、家族に支えられて26年間、手も足も動かせないままベッドの上だけで生きてきたが、遂に尊厳死の決断を！しかし、その実行は難しいものだった。

他方、ラモンは介護する家族にも恵まれていたが、彼らは「尊厳死を認める立場」と「人間が自らの意思で死ぬことなど絶対に認めないという立場」に分かれていた。また、同作には、主人公を巡って、①尊厳死を法的に支援する団体の活動家の女性ジュネ、②自分自身も不治の病を宣告されている女性弁護士フリア、③テレビで見た主人公の姿に感動したと言って主人公に会いにやってきた女性ロサ、が登場し、主人公のためにさまざまな役割を果たす姿が興味深かった。

それに対して、本作には、スイスの「安楽死を支援する協会」の女性（ハンナ・シグラ）をはじめとしてアランの尊厳死に関わる弁護士や公証人等が登場するが、それらはいくまで脇役。本作ではほとんどエマニュエルの視点にこだわっているの、観客もそれにこだわりたい。すると、そんな視点で本作VS『海を飛ぶ夢』を対比してみるのも一興だ。

■□■84歳で尊厳死を決定！VS『ファーザー』は認知症！■□■

アンソニー・ホプキンスが83歳で主演男優賞を受賞した映画が『ファーザー』（20年）『シネマ49』（26頁）。同作は、認知症が進行している父親と、彼の面倒をみる長女との人間模様が興味深かった。それに対して、本作では冒頭、脳卒中で入院した84歳のアンドレが、命に危険はなかったものの、身体に麻痺が残り、そのまま入院することになるところから物語が始まる。

急遽駆けつけてきた姉のエマニュエルと妹のパスカル（ジェラルディーン・ペラス）は、ベッドから起き上がれない父の姿にショックを受けるが、元実業家で自分の手でひと財産を築き上げた自信家のアンドレは、同室の入院患者を口撃するなど毒舌ぶりは健在。そのうえ、得意のシニカルなユーモアで娘たちを笑わせることも忘れないから、これなら大丈夫・・・？そう思っていると、MRI検査の結果、脳梗塞が確認され、回復が見られないため転院することに。そして、新しい病院のベッドに落ち着いたアンドレは、エマニュエルの手を取ると「終わらせてほしい」と頼んだが、その意味は？

『ファーザー』では、認知症の父親は、「あの男は誰だ？」「お前は誰だ？」「家を奪うつもりか？」「ここは病院？俺は誰？」等、認知症特有の症状（混乱）で、せっかくのいい父娘関係もハチャメチャになりかけた。それに対して本作では、妹がいないところで自分だけに尊厳死への協力を頼まれたエマニュエルは、さあどうするの・・・？

■□■合法？違法？誰に相談？協力者は？本人の動静は？■□■

本作はエマニュエルを主人公にしながら、フランソワ・オゾン監督がはじめて女優ソフィー・マルソーとコラボした作品だから、ソフィー・マルソー演ずるエマニュエルの存在感が大きくなるのは当然。また、原作も原作者でもあるエマニュエル・ベルンエイム氏の立場から書かれたものだから、彼女の視点から父親の尊厳死の要請にどう答えるべきかに対する試行錯誤をメインに物語が構成されているのも当然だ。

当初、「終わらせてほしい」と言われたエマニュエルは、父親の手を振りほどいて病室から逃げ出してしまうほど動揺したが、主治医に相談すると、「私にもおっしやいました。よくある反応だから、気持ち前向きになるように励ましましょう。」と言われたから少し安心・・・？他方、本作では「なぜ妹ではなく私に？」というエマニュエルの戸惑いが詳しく描かれる。さらに、①エマニュエルからの相談を聞いた妹のパスカルの反応、②エマニュエルの夫セルジュ（エリック・カラヴァカ）の反応、さらに、③夫が尊厳死を望んでいたという友人に話を聞きに行った時の友人の反応、にも注目したい。

しかし、エマニュエルにとって何よりも大切なことは、父親の要請を受け入れるための手続きを勉強をし、その段取りを進めていくことだ。「安楽死を支援する協会」を訪ね、フランスでは法律的に尊厳死は難しいと知ったエマニュエルは、スイスの協会とコンタクトをとることに。このように父親の要請を実現するべく、エマニュエルは着々と準備を進めていたが、ある日病院を訪れると、父はベッドから起き上がり、椅子に座れるところまで回

復していたからアレレ・・・。もちろん、これはエマニュエルにとって想定外の良い方向への変化だが、そこでも頑固者のアンドレの決意は変わらなかったから仕方なし。

■□■ “クソ野郎” って誰？この物語に必要なの？ ■□■

長女のエマニュエルが急いで父親のもとに駆けつける本作の冒頭のシークエンスは、『ファーザー』と同じ。また、父親の世話をするのが長女と次女の2人というのも『ファーザー』と同じ(?)。しかし、『ファーザー』には妻が登場しなかったのに対し、本作にはアンドレの妻クロード(シャーロット・ランプリング)が登場してくるうえ、後半からは、エマニュエルが「あのクソ野郎」と称する男ジェラル(グレゴリー・ガドゥボア)も登場してくるのでそれに注目!

アンドレの妻、そしてエマニュエルとパスカルの母親クロードを演じるのは、オゾン監督の常連の女優シャーロット・ランプリングだ。このクロードは彫刻家だが、見舞いに訪れた彼女は夫の顔を見て、「重症じゃなさそうね」と呟くとすぐに帰ってしまったから、アレレ。この2人は何年も別居しているのに離婚しない、という不思議な関係らしいが、こりゃいかにもフランス的・・・?

夫と友達がエマニュエルの誕生日を祝ってくれた夜、パスカルから「クソ野郎が来た」という電話が入ったので駆けつけてみると、ケンカ別れした、父親のかつての恋人(の男)ジェラル(グレゴリー・ガドゥボア)が無理矢理病室に入っていたからビックリ!何とかその場を収めたエマニュエルが別室で、「父はもう会いたくないと言っている」と告げたが、彼は納得しないから、アレレ・・・。この男は一体ナニ?そして、父親との関係は一体ナニ?これもいかにもフランス的だが、本作にこんなストーリーまで登場させる必要があるの?

そう思っていると、本作は後半からクライマックスにかけて、アンドレの尊厳死が警察に通報されたため、予想もなかったトラブルが発生!ひょっとして警察への通報者はこの男、ジェラルなの・・・?そう考えると、やっぱりこの男は本作には不可欠・・・?

■□■ スイスへの脱出劇にハラハラドキドキ!それはなぜ? ■□■

私は、TVで放映されている中国の歴史ドラマを毎日録画して観ているが、そこでは皇帝の座と後宮のトップの座を巡る権謀術策がうごめいている。そのため、謀反や反乱、暗殺や毒殺が横行し、肉親を含む人間相互の愛憎ドラマが生々しい。1つの方針を巡って朝議で賛否が分かれば、毎度のことながら、その方針を実行しようとする勢力と反対派の妨害活動が激しく対立するのも当然だ。

しかして、当初は、「終わらせて欲しい」の言葉に一瞬身を引いたエマニュエルも、その後の学習の積み重ねの中、やっと父親への協力を決意。そのための実務的な準備を着々と進めていったのはさすがだ。ところが、アンドレが尊厳死を願っているらしいとか、エマニュエルがそれに協力しているそうだとかの情報がどこからともなく漏れていくと・・・。

さらに、ジェラルルの登場によって、アンドレとジェラルルの確執(?)が改めて浮き彫りになる中、尊厳死に対するジェラルルの考え方が明確になってくると・・・?

後述の西部邁先生のケースでは、警察の捜査は自裁死の決行後になったが、本作ではかねてからの計画どおり、救急車にアンドレを乗せ、スイスへの尊厳死の旅に向かおうとする直前に警察が病室を訪れてきたから、アレレ、アレレ・・・。「ちょっと事情を・・・」という形で尊厳死の計画がバレてしまえば、フランスの法体系の下では、スイス行きはアウトになってしまうはずだ。本作後半からラストにかけては、否応なく思いもかけないハラハラドキドキの展開になっていくので、それに注目!

■□■本作は尊厳死! VS 西部邁先生は?ゴダール監督は?■□■

尊厳死と安楽死はよく似た概念だが違う。すなわち、尊厳死は、延命治療を中止して苦痛緩和ケアをしながら至る自然死のことで、安楽死は、患者の希望により医師が薬物を使用して人為的に死に至らせること。しかし、日本では法律的には認められていないから、両者とも刑法の嘱託(同意)殺人罪になる可能性がある。また、人の自殺を助けると自殺幫助罪になる。この点は、フランスもほぼ同様だ。

しかし、自分の人生の最後を自分でコントロールしたいと願う人間の気持ちは尊重されるべきだ。そのため、ヨーロッパの一部の国やアメリカの一部の州では、一定の厳しい要件の下に、安楽死や尊厳死が認められている。本作後半は、エマニュエルがスイスの「安楽死を支援する協会」の女性とコンタクトを取り、アンドレの尊厳死を実行に移していくストーリーになるので、それに注目!

なお、フランスでは、2022年9月13日にジャン=リュック・ゴダール監督(91歳)が、自殺幫助団体の助けを借りて自死したことが大きな話題になった。また、日本では、55歳頃から“自死”への決意を固めていた保守思想家の西部邁先生が、2018年1月21日、社員Kの助けを借りて“自裁死”を遂げたことが大きなニュースになった。彼の自裁死については、それに関わった2人の男性が自殺幫助の罪で起訴され、執行猶予付きながらも有罪判決を受け、それが確定したから、その社会的影響は大きかった。しかして、本作に見る尊厳死の実行は?前述のとおり、本作はラストに向けて、とんだ妨害が入ってくるため、そのスリリングな展開にエマニュエルと共にハラハラドキドキしながら、その成否を見守りたい。

2023(令和5)年2月20日記